

湧田古窯跡出土品展

— 琉球窯業の萌芽 —

琉球陶器

誕生400年記念

平成28年

6月21日(火) ▶ 7月17日(日)



目 次

ごあいさつ	1
湧田古窯跡の概要及び発掘調査成果	2
16世紀の窯業製品－朝鮮人陶工来琉以前のやきもの－	4
コラム1 瓦と磚からみた琉球の建築	6
コラム2 瓦質土器と花卉園芸文化	7
17世紀の窯業製品－朝鮮人陶工が伝えた無釉陶器－	8
コラム3 無釉陶器誕生の背景	9
18世紀以降の窯業製品－施釉陶器の登場－	10
コラム4 琉球でつくられた「輸入陶磁器」	12

【凡例】

1. 本図録は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展『琉球窯業の萌芽 湧田古窯跡出土品展 ～琉球陶器誕生400年記念～』（開催期間：平成28年6月21日から7月17日）の展示を補完するものとして編集・作成しました。
2. 企画および図録原稿執筆は、新垣力、宮城淳一、亀島慎吾が担当しました。
3. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。なお、利用にあたっては出典を明記してください。

ごあいさつ

今からちょうど400年前の1616年に、当時の琉球国王であった尚寧^{しょうねい}（在位期間：1589～1620年）が薩摩藩に懇願して朝鮮人陶工の張一六^{ちやういちろく}（張猷功^{ちやうけんこう}：^{なかに}帰化して^{れいしん}仲地麗伸^{あにいっかん}に改名）、安一官^{あんいっかん}、安三官^{あんさんかん}の三名を招聘^{しょうへい}して湧田村^{ようでんむら}で窯業が始まったとされています。湧田村と湧田窯は、現在の沖縄県庁敷地からハーバービューホテルのある楚辺や、壺川に至る一帯に所在したと考えられています。

沖縄県庁舎建設の際に、沖縄県教育委員会が1986（昭和61）～1995（平成7）年度までの10年間にわたり湧田古窯跡の発掘調査を4度実施しました。県庁舎行政棟部分に係る発掘調査では、石囲いの井戸（5基）、廃棄された屋瓦^{やがわ}や塼瓦^{せんかわら}などを再利用して屋敷内を通る排水溝の縁石の代用品や、屋敷の基礎などに使用された遺構が検出されました。

また、平窯と称される^{かわらがま}瓦窯が6基発見されました。平窯そのものは日本本土でも古くからみられますが、湧田窯のような形状をもつものはなく、その類例は中国や東南アジアに分布するといわれています。この平窯6基の内、良好な窯3基は切り取って沖縄県立博物館・美術館や那覇市立壺屋焼物博物館などで公開と保存がなされています。

ところで湧田古窯跡の出土品の中には、朝鮮人陶工及び薩摩焼の技術に影響を受けたと考えられる^{むゆうとうき}無釉陶器や、それとは別系統の技術で生産された^{やがわ}屋瓦・^{せんかわら}塼瓦・^{がしつど}瓦質土器・^き施釉陶器^{せゆうとうき}など様々な製品が確認されています。

今回の企画展『湧田古窯跡出土品展』に展示された陶器類には、沖縄の窯業史研究の進展や、今日の窯業活動における作陶技法や製品開発などの参考となる資料も存在します。先人達が残してくれた出土品から、当時の飾彩技法や製作技術などを読み解いていただき、沖縄県の文化財の魅力や価値について考える契機となれば幸いに存じます。

平成28年6月21日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 金城 亀 信

湧田古窯跡の概要及び発掘調査成果

湧田古窯跡のある現在の沖縄県庁周辺は、かつて窯業生産などを行っていた湧田村地域の一部として知られていました。湧田村が琉球王府時代の一大窯業地として活気にみちた地域であったことは、様々な文献史料や発掘調査で出土した大量の陶器片が物語っています。

湧田古窯跡は、沖縄県庁舎建設に伴い確認され、1986（昭和61）年に遺跡の範囲を確認するための調査が行われました。続いて、1986（昭和61）年から1995（平成7）年の間に、行政棟、議会棟、警察棟、県民広場地下駐車場部分の順で発掘調査が行われました。

この発掘調査により、湧田古窯では平窯や登り窯を用いていたことや、作業場跡、生産した陶器類をまとめて捨てた場所や井戸の跡、粘土を採取していた場所も見つかりました。また、おびただしい量の陶器片や窯道具等の発見から瓦、瓦質土器、無釉陶器、施釉陶器を生産していたことが判明しました。

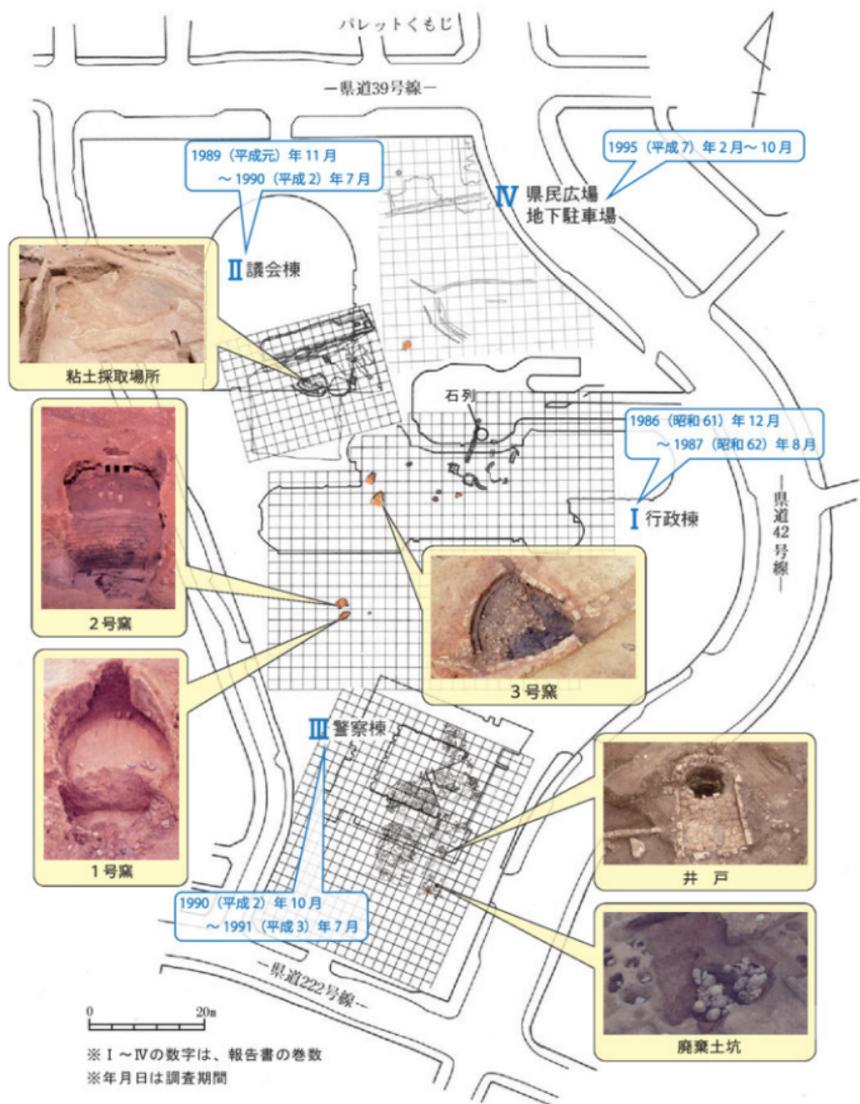


湧田古窯跡発掘調査 遠景



発掘作業状況

湧田古窯跡の調査区と主な遺構



朝鮮人陶工来琉以前のやきもの

湧田窯において、いつの時期から窯業生産が始まったのかはわかってはいませんが、発掘調査の成果からどのような製品が生産されたかについて明らかになってきました。

16 世紀の湧田窯では、主に屋根に葺く瓦や、床や壁などに利用される塼、瓦質土器と呼ばれる胎土や焼成方法が瓦と類似する製品が生産されていました。

特に瓦質土器は、植木鉢や深鉢、浅鉢、播鉢といった鉢類のほか、碗や壺、茶釜、香炉、火炉など様々な製品が発掘調査で出土しています。これらの瓦質土器の中には本土で生産されたものを模倣したと考えられるものがあり、これらを研究することで当時の琉球の人々がどのようなやきものを必要としたかを知る重要な手がかりとなっています。



湧田古窯跡出土の瓦・塼・煉瓦



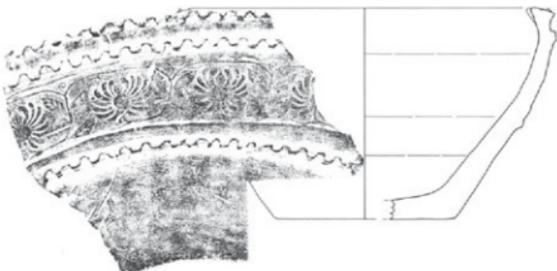
湧田古窯跡出土の瓦質土器



湧田古窯跡出土の瓦当范



湧田古窯跡出土の瓦質土器
・植木鉢用施文具



施文具と同じ文様の瓦質土器・植木鉢

.....

コラム1 瓦と塼からみた琉球の建築

.....

これまでの発掘調査成果や文献史料によると、14～15世紀の琉球に瓦葺き建物があったことは現実視されているものの、塼を敷いた施設の存在は現在のところ不明で、また当時の瓦と湧田窯産の瓦との関係もわかっていません。その後、16世紀頃になると湧田窯で瓦や塼の生産が開始されますが、これらは当時の琉球における建築を考えるうえで非常に重要な資料といえます。

瓦は日本でも古くから使われていますが、当初の主な用途は特定の建物を荘厳に飾ることであったと考えられます。琉球もその点は同じで、瓦が登場した14～15世紀から湧田窯で生産するようになってからも、瓦葺きは基本的に首里城や王府に関連する施設に限定されていました。しかし、日本では江戸時代になると防火の視点から瓦が急速に普及するのに対し、琉球では17世紀以降も瓦を特定の施設・建物以外に使用することが禁じられており、瓦と王府の強い結び付きを感じることができます。

また塼については、湧田窯でも多様な製品が生産され、床面を構成する敷塼のほか、壁面や屋根、暗渠の部材として用いられますが、やはり瓦と同じく、確認される場所は首里城跡や王府に関連する施設に限られています。

.....
コラム 2
.....

がしつど き か き えんげい
瓦質土器と花卉園芸文化

瓦質土器の植木鉢は、他の器種にはみられない装飾性の高さや、複数のサイズが物語る用途の多様さ、また補修の痕跡を残す資料が確認される点などから、瓦質土器の中でも非常に特徴的な製品といえます。

沖縄の遺跡で植木鉢が出土し始めるのは16世紀頃で、中国産陶器と瓦質土器の製品がほぼ同時期に登場します。このことから、当時の琉球では鉢植えの植物を觀賞する文化があり、そのために輸入品だけでなく、自ら生産した植木鉢を用いていたことが窺えます。日本で花卉園芸が盛んになるのは主に近世で、専用植木鉢の出現も近世の後半まで待つこととなります。つまり、瓦質土器の植木鉢は、当時の琉球で展開した花卉園芸文化を象徴する重要な資料なのです。

ところで、瓦質土器の植木鉢には何が植えられていたのでしょうか。現在のところ答えはわかりませんが、前述したように植木鉢の形態やサイズにバリエーションがみられるため、例えば盆栽程度から蘇鉢くらいの大きさまで様々な植物が植えられていたと考えられます。



瓦質土器の植木鉢
(湧田古窯跡出土)



中国産無釉陶器の植木鉢
(首里城跡出土)

朝鮮人陶工が伝えた無釉陶器

文献史料によると、1616（元和2）年に薩摩から3名の朝鮮人陶工を招聘したという記述が残されており、この3名が湧田村で技術指導を行ったことによって陶器生産が始まったとされています。これが沖縄県での無釉陶器生産のスタートとなりました。

近年、発掘調査の結果から、湧田窯跡で生産された当初の17世紀代の無釉陶器が判明してきました。生産されていたものは、壺、鉢、甕などの大型製品から、碗、皿、急須、などの小型製品まで様々なものがあります。これらの中には、薩摩焼と共通する方法をまねて生産したものに加え、様々な技術を用いて陶器を生産していたことが判明しています。またそれらは、高火度で焼成され器の外表面に泥釉などが塗られるものがあり、薄紫色に輝くものもあります。

湧田窯で始まった無釉陶器は、現在でも生産が行われ、様々な遺跡だけでなく現在の民家でも目にすることができます。これらの無釉陶器の中には、湧田窯のみでなく、壺屋窯など県内各地の窯場で生産されたものが含まれています。

無釉陶器のことを沖縄の方言では「アラヤチ」と呼び、人々の生活に欠かせないものでした。



湧田古窯跡及び消費地遺跡出土の無釉陶器

コラム3 無釉陶器誕生の背景

現在のところ、無釉陶器は1616年に薩摩から招聘された朝鮮人陶工の技術指導によって誕生したと伝えられています。ここでは、当時の琉球で無釉陶器が必要になった理由を考えてみましょう。

無釉陶器が登場する前に琉球で生産されていたのは瓦質土器です。瓦質土器に多く確認されるのは口が開く鉢形の器種で、口がすぼまる壺形や瓶形はほとんどみられません。また瓦のように低火度で焼成しているため吸水性が高く、液体の貯蔵を目的とした製品には不向きです。

琉球は17世紀以降に近世日本の幕藩体制下へ組み込まれて以来、一般に「江戸上り」と称される使節の派遣が義務づけられ、その際の献上品には必ず焼酎（泡盛）が含まれていました。記録をみると、焼酎（泡盛）は壺に入れて運ばれたようですが、瓦質土器がこの用途に適しているとは言いがたいため、液体の漏れない新たな製品が必要になったと思われる。無釉陶器は高温で焼成しているため吸水性が低く、また瓦質土器にはほとんどみられなかった壺形や瓶形の器形が登場する点も考慮すると、酒を運搬する容器の需要が増加したことは、無釉陶器誕生の要因と無関係ではないと思われる。

江戸時代に将軍へ献上した泡盛一覧表

西暦	和暦	使名	献上者	名称	数量(壺)	被献上者
1634年	寛永11年	謝恩	尚豊	焼酎	5	家光
				佐敷王子	焼酎	
1644年	正保元年	謝恩	尚豊	尚豊	焼酎	5
				金武王子	焼酎	3
				国頭王子	焼酎	2
				尚豊	焼酎	10
				金武王子	焼酎	2
1646年	慶安2年	謝恩	尚豊	尚豊	焼酎	5
				具志望王子	焼酎	2
				尚豊	焼酎	3
1653年	承応2年	慶賀	尚豊	尚豊	焼酎	5
				国頭王子	焼酎	2
1671年	寛文11年	謝恩	尚豊	尚豊	泡盛酒	5
				金武王子	泡盛酒	2
				名護王子	泡盛酒	10
1682年	天和11年	謝恩	尚豊	尚豊	泡盛酒	10
				名護王子	泡盛酒	2
				若君(家宣)	泡盛酒	2
1710年	宝永7年	謝恩	尚豊	尚豊	泡盛酒	10
				美里王子	泡盛酒	2
				尚豊	あわり酒	5
				家宣	あわり酒	5
1714年	正徳4年	慶賀	尚豊	尚豊	泡盛酒	5
				豊見城王子	泡盛酒	2
				尚豊	泡盛酒	10
				尚豊	泡盛酒	5
				天美院(家宣夫人)	泡盛酒	5
		謝恩	尚豊	尚豊	泡盛酒	5
				尚豊	泡盛酒	5
				金武王子	泡盛酒	2
				尚豊	泡盛酒	3
				天美院	泡盛酒	2
1718年	享保3年	慶賀	尚豊	尚豊	泡盛酒	10
				具志川王子	泡盛酒	2

西暦	和暦	使名	献上者	名称	数量(壺)	被献上者
1748年	寛延元年	慶賀	尚豊	尚豊	泡盛酒	10
				具志川王子	泡盛酒	2
				尚豊	泡盛酒	5
				具志川王子	泡盛酒	2
				尚豊	泡盛酒	5
1752年	宝暦2年	謝恩	尚豊	尚豊	泡盛酒	5
				今帰仁王子	泡盛酒	2
				尚豊	泡盛酒	2
1764年	明和元年	慶賀	尚豊	尚豊	泡盛酒	10
				読谷王子	泡盛酒	2
				尚豊	泡盛酒	5
1790年	寛政2年	慶賀	尚豊	尚豊	泡盛酒	5
				読谷王子	泡盛酒	2
				尚豊	あわり酒	2
1796年	寛政8年	謝恩	尚豊	尚豊	泡盛酒	10
				吉野藤王子	泡盛酒	2
				尚豊	あわり酒	2
				尚豊	泡盛酒	2
				大宜味王子	泡盛酒	2
1806年	文化3年	謝恩	尚豊	尚豊	泡盛酒	3
				大宜味王子	泡盛酒	2
				尚豊	泡盛酒	2
				尚豊	泡盛酒	2
1832年	天保3年	謝恩	尚豊	尚豊	阿骨熟料酒	3
				尚豊	阿骨熟料酒	3
				尚豊	泡盛酒	5
1841年	天保13年	慶賀	尚豊	尚豊	泡盛酒	10
				清池王子	泡盛酒	2
				尚豊	泡盛酒	2
1850年	嘉永3年	謝恩	尚豊	尚豊	泡盛酒	5
				玉川王子	泡盛酒	2

※宮城東篇「琉球王政の外交用泡盛」より

せゆうとうき 施釉陶器の登場

1682 年に知花窯・宝口窯と共に壺屋へ統合された後、湧田窯がどのような変遷を辿ったのか、現在のところははっきりとしたことは不明です。しかし発掘調査の成果によると、おそらく 18 世紀以降も窯業が営まれていたと考えられます。この時期の特徴には施釉陶器生産の本格化が挙げられ、灰釉・鉄釉・緑釉・海鼠釉など様々な釉薬が使用されていました。

ちなみに、文献史料や絵画などからも、18 世紀以降の湧田窯の様子が窺えます。琉球の正史『球陽』には、仲村渠致元が湧田で薩摩から伝授された「磁器」を焼いた（1731 年）との記述や、瓦の粘土採掘地及び窯場を現在の美栄地あたりから湧田に移した（1799 年）との記述があり、また 19 世紀後半に描かれた「首里那覇図」にも、壺屋及び湧田と思われる場所に登り窯と煙が確認されています。これらの内容は、湧田窯が 18 世紀以降も操業した可能性を示しており、かつ考古資料の様相にも類似するといふ点で、非常に興味深いといえます。



湧田古窯跡及び消費地遺跡出土の施釉陶器



首里那覇図 [沖縄県立図書館蔵] にみる壺屋と湧田 (○：壺屋 ○：湧田)



湧田古窯跡出土の施釉陶器用窯道具

コラム4 琉球でつくられた「輸入陶磁器」

首里城跡や中城御殿跡などからは、まれに精緻なつくりの施釉陶器が出土します。これらは胎土・器形・文様・釉薬などの特徴が他の施釉陶器と異なり、同時期に輸入された本土産磁器や中国産磁器を模倣したと考えられるもので、施釉陶器の中でも非常に上質な製品です。これらの存在は、当時の琉球が持っていた陶器生産技術の高さを示すものといえます。

一方、文献史料にも陶器生産技術の水準を窺わせる興味深い記述がみられます。『琉球館文書』1807年の項では、薩摩から発せられた「近年琉球經由で運ばれる中国産磁器の品質が低下しているが、琉球で生産した偽物を輸出しているのではないか」との疑義に対し、琉球は「中国産磁器に似せた製品の生産は禁止している」と答えています。この内容からは、当時の認識として、少なくとも薩摩は琉球に中国産磁器の偽物を生産する技術があると考えていること、また琉球も技術自体の存在は否定していないことがわかります。遺跡から出土する上質な施釉陶器は、もしかしたらこのような技術で生産された製品なのかもしれません。



中国産磁器を模倣した施釉陶器
(中城御殿跡出土)



本土産磁器を模倣した施釉陶器（首里城跡、中城御殿跡、真珠道跡出土）

《参考文献一覧》

- 新垣力 2013「17世紀前半～中葉の琉球陶器について－「初期無軸陶器」にみる薩摩焼の影響－」『鹿
見島考古』第43号 鹿児島県考古学会
- 石井龍太 2010『新典社選書39 島瓦の考古学－琉球と瓦の物語－』新典社
- 石井龍太 2011「琉球近世植木鉢の系譜～アジアの中の琉球園芸文化～」『南島考古』第30号 沖縄
考古学会
- 上原静 2013『琉球古瓦の研究』榕樹書林
- 沖縄県教育庁文化課（編）1993『沖縄県文化財調査報告書第111集 湧田古窯跡（Ⅰ）－県庁舎行
政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課（編）1995『沖縄県文化財調査報告書第121集 湧田古窯跡（Ⅱ）－県庁舎
議会議棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課（編）1997『沖縄県文化財調査報告書第129集 湧田古窯跡（Ⅲ）－県庁舎警
察棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課（編）1999『沖縄県文化財調査報告書第136集 湧田古窯跡（Ⅳ）－県民広場
地下駐車場建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館（編）2011『沖縄県立博物館・美術館×那覇市
立壺屋焼物博物館 合同企画展 琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館
- 球陽研究会（編）1974『沖縄文化史料集成5 球陽 読み下し編』角川書店
- 金城亀信 1998「沖縄県の江戸前期相当期の陶器と製作技術－湧田古窯跡の発掘調査成果より－」『第
8回九州近世陶磁学会資料 江戸前期における九州・山口地方の陶器－窯跡資料を中心とした－』
九州近世陶磁学会
- 倉成多郎 2014『ボーダー新書010 壺屋焼入門』ボーダーインク
- 那覇市総務部市史編集室（編）1970『那覇市史 資料篇 第1巻の2』那覇市
- 比嘉朝健 1935「琉球の陶器」『陶器講座』第3巻 雄山閣
- 深港恭子 2000「薩摩焼をめぐる苗代川関係文書について」『黎明館調査研究報告』第13集 鹿児島
県歴史資料センター黎明館
- 外間守善・波照間永吉（編）1997『定本 琉球国由来記』角川書店
- 宮城栄昌 1982『琉球王府の外交用泡盛』『南島文化』第4号 沖縄国際大学南島文化研究所

沖縄県立埋蔵文化財センター

平成28年度企画展

「琉球窯業の萌芽 湧田古窯跡出土品展」

～琉球陶器誕生400年記念～

発行日：平成28（2016）年6月21日

編集・発行：沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

HP <http://www.pref.okinawa.jp/edu>



沖縄県立埋蔵文化財センター
今後の催し

発掘調査速報展 2016

平成 28 年 8 月 2 日 (火) ～ 9 月 4 日 (日)

※ 8 月 6 日 (土) に、関連文化講座を予定しております。



琉球陶器誕生 400 年記念
関連行事一覧

平成 28 年 7 月 2 日 (土)

沖縄考古学会 2016 年度研究発表会

「琉球陶器誕生 400 年記念 16～17 世紀の沖縄
における窯業の展開とその背景」

平成 28 年 7 月 8 日 (金) ～ 10 月 5 日 (水)

首里城公園 企画展

「来琉 400 年記念 琉球王国のやきもの展」

平成 28 年 11 月 1 日 (火) ～ 12 月 25 日 (日)

那覇市立壺屋焼物博物館 特別展

「琉球陶器誕生四〇〇年記念 一六一六年
～朝鮮人陶工来琉四〇〇年～」

※詳細は各機関に直接お問い合わせください。

沖縄県立埋蔵文化財センター

〒 903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL : 098-835-8751

FAX : 098-835-8754

入所無料

【開所時間】午前 9 時～午後 5 時 (入所は午後 4 時 30 分まで)

【休所日】毎週月曜日、国民の祝日 (こどもの日、文化の日を除く)
年末年始、慰霊の日 (6 月 23 日)

※月曜日が祝日となった時は、翌日の火曜日も休所